けいおん　DARKHERO＆STRAWBERRY

六甲水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん　ＤＡＲＫＨＥＲＯ＆ＳＴＲＡＷＢＥＲＲＹ

【Ｎコード】

Ｎ８８４８Ｏ

【作者名】

六甲水

【あらすじ】

殺し屋である青年が一人の少女と出会うとき、彼の日常が大きく変わった。

プロローグ（前書き）

六甲水「新連載開始だ。」

雪那「いちご先輩の奴だっけ？」

霧夜「というか、作者、上げすぎ。全部書けるんですか？」

六甲水「頑張る。というわけでどうぞ」

プロローグ

「ひっ、ひっ、や、やめろ。俺が悪かった。もう二度とあんなことはしない」

早朝、とあるビルに一人の男が怯えていた。周りは一面血の海となっていた。そして、男の前に黒いコートを着た青年がいた。青年の手には血に染まった刀が握られていた。

「残念だが、お前はやりすぎた。呪うなら自分自身の行いを呪え。」

「ひ、人殺し」

「それは最高の褒め言葉だ。」

青年の名前は無朱締六華（むすじめりっか）。闇の中でしか生きられない男。六華が仕事を終え、ビルの中から出ると、そこに白髪の少女が少女が待っていた。

「……おかえり。お兄ちゃん。」

「……仕事は終えた。帰るぞ。白雪」

「……はい。」

彼女は霧生白雪。４年前からの付き合いだ。何故か六華のことを『

おにいちゃん』と呼ぶのかは不明である。

しばらく歩き、とあるバーに入る二人。バーの名前はＣＨＡＯＳ
名前の通り店の中はかなりカオスだった。店員が全員オ〇マなのだ。
今は営業していないが、二人で椅子に座ると店長らしき男が……

「男じゃない。女よ。」

女が話しかけてきた。

「仕事は？」

「上々だ。ターゲットはやっぱり裏で麻薬を捌いていた。それもあそこは警察が手出し出来ない場所だったからな。」

「そうね、きーちゃんたら、いつも仕事頼んでくるからね。」

「……マスター。牛乳」

白雪は眠そうな眼をしながら、マスターからミルクをもらって飲んだ

「はいはい、それにしても、その子ためにこの仕事やめる気はないの？」

「ない。俺はこれしか知らないからな。」

六華は寂しげな表情をしながら、ウイスキーを飲む。マスターはそ

の表情を見てため息を付いた

「まったく、殺し以外、違うものに興味を持ったら？」

「なんだそれは？」

「恋愛とか」

「つまらん、」

普段ならマスターの店で寝泊りをしているが、今日は公園で寝ることにした。理由はたまにあのマスターが襲ってくる可能性があるからだ。白雪はあそこにいても危険はないから大丈夫だ。そう思い、ベンチに横たわる。

（恋愛とか、あのマスター変なことも言う。俺にそんなものはいらない。）

そうして、そのまま寝ようと眼を閉じたとき、何故か視線が感じた。眼を開けるとそこに茶色の髪に髪を二つに縛った女学生がみていた。

（な、何だこいつは）

「こんな所で寝ていると風邪引きますよ。」

それが彼女との出会いだった。

プロローグ（後書き）

六甲水「六華くん登場。」

六華「何だ。作者。」

雪那「てか、殺し屋って、というか白雪も登場かよ。」

白雪「……記憶がないらしいけど。」

霧夜「てか、何で殺し屋なんだよ。」

六甲水「ヒーローよりダークヒーローの方が好きだから。」

雪那「このバカ殺していいですよ。六華さん。」

六華「分かった。」

六甲水「ぎゃあああああああああああ」

霧夜「というか、この話って、若干世界観は同じなの？」

白雪「平行世界だから、普通にお兄ちゃんが出てくるかもしれないって」

雪那「うわ、めんどくせぇ」

第1話　公園での出会い（前書き）

六甲水「今回は出会いの話です」

六華「愛なんていらないな」

六甲水「そんな事言って、ねぇ、ロリコン」

六華「〇ね」

第1話　公園での出会い

いきなり声をかけられ、無視を決め込もうとした。だが、その少女はじっとこっちを見ていた。しょうがなく、答えることにした。

「何か用か？」

「いえ、こんな所で寝ているということは……浮浪者なのかと、」

こいつ、さっき風邪がどうの言ってなかったか？

「服を見ろ。こんなに綺麗な服を着た浮浪者がいるはずねぇだろ」

「……そうですね。すみません。つい、でも、ここにいると本当に風邪を引いてしまいますから、気をつけてください。」

少女はそう言って、そのまま去っていった。一体なんなんだ？ただの変わり者か？

しばらくして、バーの上にある家に戻った。家に入ると白雪が布団にくるまっている。俺は郵便受けに入ってあった手紙を見ると、殺しの依頼が入ってあった。殺しの依頼はマスターが警察の知り合いから依頼を受けるか。俺が入っている組織から直接もらうかしている。俺は殺しの衣装に身を包み、出かけた。

今度の場所はビジネスホテル。そこのホテルの従業員が麻薬を取引していると聞き、抹消をしに来た。

ターゲットである従業員はエレベーターに乗った。俺も一緒に乗る。

「ん、君は新人だね。ここのホテル色々と厳しいからがんばれよ。」

ターゲットは俺に労いの言葉をかけてきた。普通なら適当に相槌を打つが、俺は……

「そうですね。ですが、取引はこういう所でしたほうがいいですよね。」

「はぁ？何……ぐはっ、」

右腕に仕込んである刃でターゲットの心臓を一突きし、俺はそのままエレベーターを脱出した。あとの処分は奴に任せることにする。

家に帰りながら、マスターが言ったことを考えていた。愛なんてくだらないもの。必要なものはこの世から悪を消すこと、自分が悪になろうともそんなものいらない。

そう思いながら歩いていると曲がり角で誰かとぶつかった。それは今朝の少女だ。

「お前、」

「……？。」

再び彼女と会うことで何かが始まった。

第1話　公園での出会い（後書き）

六甲水「次回からはいちごとの関係が……」

六華「するのか？」

六甲水「しません。白雪ちゃんの話です」

白雪「私なんだ。」

第2話　白雪（前書き）

六甲水「今回は白雪視点です」

白雪「……メインヒロイン」

雪那「あくまでメインヒロインはいちご先輩じゃないのか？」

第2話　白雪

夜、白雪は六華を探しまわっていた。仕事に行ってるからそれなりに時間は掛かるはずだけど、普段より、少し遅い気がした。

（お兄ちゃん。仕事に行ったのは7時すぎ、でも今はもう9時回ってる。きっと、何か遭ったんだ。早く見つけないと……）

白雪には、記憶がない。街の裏の世界で一人いたときに、六華がたすけてくれた。そして、マスターに頼んで、本当の家族のことを探してくれるように頼んだ。頼れる人を失うの嫌だ。そう思い、白雪は走っていた。

六華ｓｉｄｅ

六華は今朝出会った少女とまた出会っていた。今朝は制服だったが、今は私服に手にはコンビニの袋を持っている。

「……あぁ、今朝の」

「お前、忘れてたのか。」

溜息をつく。あんまり自分の存在を覚えて欲しくはないが、まさか今朝会ったばっかの奴の顔を忘れるとは……

「忘れていたわけではないです。ただ、今朝気がつかなかった事に気がついて……」

「ん、何がだ。」

「右腕、義手なんですね」

少女は俺の右腕を見て言う。普段は義手を隠しているが、今は仕事帰り、返り血の処理はしてあるけど、義手を隠すまでには行かなかった。とりあえず、本当の事を言わないように気をつけよう。

「昔、事故でな。そん時からだ。怖いか？」

「いえ、ただ気になったので、それでは、」

少女はそのまま立ち去った。なんつうかまた会いそうだな。そう思いながらその場を立ち去ろうとすると、白雪を発見した。

「白雪。なにしてるんだ？」

「お兄ちゃん。遅かったけど、何か？」

「いや、別に……帰るか」

「うん、」

その数日後、まさかあんな依頼があるとは思っていなかった。

第2話　白雪（後書き）

六甲水「次回、少しだけ進展します」

雪那「本当かよ。てか、白雪の話もやるのか？」

六甲水「やりますよ。次回をお楽しみに」

第3話　闇の中（前書き）

六甲水「今回は六華が所属する組織での話と、ちょっと、物語が進展するかも」

六華「……使えない作者だな。」

六甲水「ひどい、」

白雪「……始まります」

第3話　闇の中

某所　デパート・地下駐車場

六華と白雪はあるデパートの地下駐車場に来ていた。そこは駐車している車が多くあった。そのある壁に隠されている扉を開け、二人は入った。そこには、初老の老人が一人座っているだけの狭い空間で、かなり窮屈だ。

「なんの用だ。じいさん。」

六華は老人に話かける。すると老人はただニタニタと不気味に笑うだけだった。

「おい、笑ってないで了見をいえ。俺だって暇じゃないんだ。」

六華がさらに言うと老人は笑うのをやめ、話し始めた。

「ふむ、いいではないか。笑顔は大事じゃぞ。あいさつ、笑顔が全てを制す。それを理解しろ。六華」

「ふん、くだらない。今日は何だ。この前はちゃんとあいつが処理したはずだぞ」

すると、老人が六華にある封筒を渡した。封筒の中を見ると中には、一人の女学生の写真が入っていた。

「なんだこれは？今度のターゲットか？」

六華が怪訝そうにいうと、老人は首を横に振り、答えた。

「今回の仕事はこの少女を狙う殺し屋を殺せじゃ。」

「殺し屋の殺しか。何でこいつが狙われている。答えろ」

「それは、君が自分で確かめろ。それとかなりの長期間の仕事になるから、頑張れよ。」

話を聞き終わり、六華と白雪は部屋を出て行った。

二人はデパートの屋上でもらった写真を見ていた。

「……この娘、女子高生だね。それも桜ヶ丘の……」

「ふん、あのじじい。何も教えてくれなかったが、封筒の中にもう一枚入ってたぜ。」

封筒の中に入っていたのは写真ともう一つ、少女の詳細と自分たちがやるべき事についてだ。白雪はその紙を受け取り、読む。

「えっと、この娘、一人暮らしなんだ。すでに彼女に話は通してあるから、合流するようにか。」

「あぁ、護衛なんかの仕事なんか、かなり久しぶりだ。それに、別の仕事もやりながらかもな。はぁ、ひどい仕事だ。」

「……護衛方法は、お兄ちゃんが彼女の専属のボディーガードとしてで、私が生徒になりすますんだって、」

「……やるしかないか。行くぞ。白雪」

「うん、」

二人は少女がいるマンションを目指した。

第3話　闇の中（後書き）

六甲水「ふぅ、おわ……」

雪那「半端なところで終わらせやがって、」

六華「やる気が感じられないな」

小雪「そうだね。」

白雪「……ダメな人だね」

六甲水「ひどい、頑張ったのに、ちなみに、護衛相手はオリキャラだからね」

雪那「泣きながら説明するな。」

第４話　天原流歌（前書き）

六甲水「今回は新キャラが登場です。」

六華「依頼人だな。」

六甲水「それともう一人ね」

第４話　天原流歌

依頼を受けて次の日、俺と白雪は一緒に依頼人が住むアパートを訪れた。

「ここか、」

俺は依頼人がいる部屋の呼び鈴を鳴らし、しばらくしてから黒髪に、髪の長さは肩まである少女が出てきた。少女は俺と白雪の顔を見ると状況を理解した。

「貴方達が護衛の人ですか？」

「とりあえずはな。」

「よろしくです。」

家の中に入るなり、彼女……天原流歌と白雪は制服に着替え、俺は黒いスーツに着替えた。

（……護衛の依頼か。仕事なら何でもやるが……気になるのは、天原流歌が何故殺し屋に狙われるかだ。今は仕事に徹するのみだ）

白雪と天原は一緒に学校に向かい、俺は裏のほうからこっそりと入りこみ、屋上で待機をしていた。

俺は屋上で生徒たちの様子を見ていた。それは久しく見ていない明るさに満ちた笑顔を振りまく生徒たちだ。

（学校か。子供の頃からずっとこの世界に身を投じてたからな。）

そんなことを考えていると……殺気を感じた。その殺気は屋上に入る扉から感じた。

「……誰だ？」

振り向くとそこには今の季節に合わない真っ赤なマフラーを首に巻き、手には黒く光る拳銃と背中にライフルを背負っている男がいた。

「同業者だ。無朱締六華。いや、裏の通り名で呼んだほうがいいか。なぁ、黒き影」

「なるほどな。お前はスナイパーか。丁度いい。情報が欲しかったところだ。色々と聞かせてもらおうか。」

二人の暗殺者が出逢い、今血と血の戦いが始まる。

第４話　天原流歌（後書き）

六甲水「暗殺者が登場だね」

雪那「なぁ、普通に昼間に暗殺とかやっていいのか？てか、戦うとか生徒たちにかなり迷惑かかるだろ」

六華「そこら辺は、次回あたり説明されるな。あの暗殺者が天原をどう殺すか。生徒たちに聞かれないように戦うなどは……」

六甲水「説明されちゃった。」

キャラ紹介（前書き）

六甲水「今回は六華と白雪と天原さんのキャラ紹介です」

キャラ紹介

キャラ紹介

無朱締六華（むすじめりっか）1

年齢は23歳。『組織』に所属する殺し屋の一人。冷静沈着な性格。小さいころ事故にあい、右腕が義手を付けている。義手には隠し刃など殺しの武器が仕込んである。事故に遭った数日後、組織に拾われ、殺しについて学んだ。狙った相手は必ず殺し、着ている服から裏の世界で『黒き影』と呼ばれている。殺しの武器は、日本刀・仕込み刃

霧生白雪（きりゅうしらゆき）1

三年前に六華に拾われた少女。記憶がなく六華のことを兄みたいに慕っている。基本的に六華にくっついている。大人しい性格だが、間違ったことを行っている人が許せない。

天原流歌

六華の依頼人。ある事から殺し屋に狙われてしまい、六華が所属する組織に依頼を頼んだ。優しい性格だが、六華には何か裏が感じると思われている。

二名言音（にいなことね）1

年齢は23歳　六華と同じ『組織』に所属する殺し屋の一人。普段

は優しく、仲間の相談などに乗るが、仕事時には、血を見ると興奮する。そのため、仕事時にはいつも白い服を着ている。六華とは古い仲で一番六華の事を心配している。コードネームは『血染めの花嫁』と呼ばれている。殺しの武器は、銃なら何でも使えるため、その日の気分で決めている。

キャラ紹介（後書き）

六甲水「重要人物が登場するたびに更新して、キャラ紹介は増やしていきます」

第5話　スナイパー（前書き）

六甲水「今回はいちごとの関係が進みます」

六華「進むのか？前回、殺し屋が出てきたばっかだろ」

白雪「……ちゃんとどう殺すかとか屋上で戦ってバレないのか？やるんですか？」

六甲水「殺しの方法はまだ明かさず、戦ってバレないかはやります。」

第5話　スナイパー

六華は突然現れた男と対峙していた。男の手にはベレッタＭ９３Ｒと呼ばれる高い制圧力を持つ拳銃を持っていた。さらに背中にはスプリングフィールドＭ１４と呼ばれる狙撃銃を背負っていた。

「ここからなら十分に狙えるんだ。退いてもらおうか。」

「嫌だといったら？」

「貴様を殺す。」

そういって、男はベレッタＭ９３Ｒを撃ってきた。六華は義手に仕込んである刃で弾を弾いた。

「弾を弾くとは、素晴らしい動体視力だな。」

男がそう言うと六華は鼻で笑った。

「残念だが、動体視力がいいんじゃない。ただ単に昔から弾を避ける訓練をやらされただけだ。」

六華は男に接近し、斬りつけようとする。だが、男は銃で防いで距離を置き、銃弾を３発放つが、六華はそれを避けた。

（おかしい。ここまで大きな音を立てているはずなのに、騒ぎになっていない。どういうことだ？）

そのころ、白雪と流歌は……

「さっきからうるさい音がしてますが、何ですか？流歌さん。」

「確か、学校の工事でうるさくなると先生が言ってました。」

二人は廊下を歩きながら話をしていた。

「……工事。気をつけてください。この音で狙撃した音などは多分聞こえづらいと思います」

「……狙撃。ですが、大丈夫ですわよね。あの六華さんが守りますから」

流歌は安心した表情で言った。だが、白雪は少し暗い顔をしていた。

（守るか。お兄ちゃんは守るより、殺すほうが得意なんですよ。流歌さん）

「ハァ」

六華は拳銃を弾き、男の腹に強烈な蹴りを食らわせ、男は屋上の柵にぶつかった。

「ぐほ、銃が……貴様……」

「さて、狙撃銃を使ってどうするんだ？いくら、工事の音で狙撃の音がごまかせても、撃ち殺したら、暗殺がバレるぞ」

「しゃ、しゃべる…もの…か」

「なら死ね。」

六華は男の眉間に刃を突き刺し、屋上をあとにした。

「あいつの処理は、組織がやるだろ。それと、この狙撃銃に込められた弾について調べてもらうか。」

その後、放課後になり、流歌と白雪を先に帰らせ、六華は辺りの様子を見渡していた。きっとどこかにトラップなどがあると思い、位置の確認をしていた。

(眼に見える罠はないが……増援を呼んだほうがいいか。……ん)

六華はこっちに歩いて来る女子生徒に気がついた。その生徒はここ最近出会った少女だ。少女は六華の前に立ち止まった。

「お前は……」

「……こんな所で何をしてるんですか?遠目から不審ですよ」

少女は無表情で言ってきた。六華はため息を付き、

「悪いが、今は仕事中だ。」

「ガスの点検とか言ったら、通報します」

少女は携帯を取り出して言ってきた。こいつ、一体なんなんだ？

「違う。俺は警備会社で働いている。先生にでも……」

「あ、先生がきました」

少女が向いた方向からメガネを掛けた女教師が歩いてきた。

「聞いてみていいですか？」

そう言って、教師のところに行こうとした少女を六華は、腕をつかみ、叫ばれたらマズイと少女とキスをした。

（今、叫ばれて警察を呼ばれると色々とまずい。）

女教師はその光景を見るやいなや、急いでその場を立ち去った。それを確認し、六華は少女を離した。

「悪かったな。いきなり、」

六華が謝ると、少女は顔を真赤にしながら、六華の頬を叩き、去っていった。

「……なぜ逃げる？まぁいい。今日はなんとかやり過ごせたな。ん、これは……」

何かが落ちていたので、気になり、拾ってみるとそれは、学生証だった。そこにはさっきの少女の写真が貼ってあり、名前は……

「若王子いちごか。甘そうな名前だな」

今回のことがきっかけに六華の仕事が大変な事となっていくのだった。

第5話　スナイパー（後書き）

流歌「……」

白雪「……」

六華「…何だ？」

白雪「……無理やりキス」

流歌「……彼女傷ついてますね」

六華「あの場合仕方ないだろう」

白雪「……仕方ないの？」

流歌「…どうでしょう？」

いちご「／／／／／／／／／／／／／／」

六甲水「まぁ、六華さんらしいかなって、次回も少し進みます」

第6話　変わりゆく自分（前書き）

六甲水「今回は、六華さんの仕事にある変化が……」

六華「……一体何が起こるやら」

六甲水「ちなみに、六華さんの仲間の一人が登場します」

第6話　変わりゆく自分

天原流歌の護衛の仕事を受けている六華だが、今はある悪徳政治家の家で殺しの仕事をしている。護衛中でもそういった仕事が入るのは元々聞かされていた。

「や、やめろ。わ、私が何をしたというのだ」

怯える政治家。だが、六華はただ淡々と政治家に向かって言った。

「お前が行った悪行の数を数えろ。それが、お前が殺される理由だ。」

六華は刀を政治家の体に突き刺した。普通ならこの時点で六華の仕事は終わるはずだった。だが、

「ひぃぃぃぃぃぃーーー、痛い痛いーーー」

六華の刀は政治家の右肩に刺さった。いつもなら心臓を一突きのはずが今回は肩に刺してしまった。

（馬鹿な……俺が、一撃で仕留められない。）

一撃で仕留め切れなかったことがショックで、しばらく動くことが出来なかった。その時、政治家は隠し持っていた銃を構え、六華に引き金を引いた。

「しまっ、」

パァンと乾いた音が部屋中に響いた。だが、六華の体に傷ひとつ付いていない。代わりに政治家の額に一発の銃創があった。

「コレは……」

「あらら、珍しい失敗するものだね。六華」

「……言音」

後ろにいたのは、白い髪をポニーテールにしていて、服は真っ白なドレスを着ているが、今はそのドレスも髪も血に染まっている少女、二名言音だった。言音もまた六華の所属する組織の一人だ。

「お前、何故……」

「何故って、今回は陽動もあったのよ。私がこのブタのボディーガードを血に染めて、あんたは目標を駆逐。そういう作戦よ。聞いてなかったの？」

言音が少し心配そうな顔をしていた。確かに、普段なら命令をしっかり聞いてるはずなのに……

「何かあったのね。いいわ。報告を終えたら少しあそびましょう」

報告を終え、言音と二人で（白雪は天原流歌と一緒に寝ている）、あるバーに入った。そこは言音の行きつけのお店だ。仕事関係の話をしても誰も耳に入れない。

「それで、今回は何であんな失敗を？」

「分からない。組織では一撃一殺なのに……何故か、今回は……」

「今日だけならいいわ。でも、これ以上続くなら対処されるわよ。原因は？」

六華は少し考えこみ、ある日、無理やりキスをしたことを思い出した。

「そうだ。今やっている護衛の仕事である少女とキスをしたことぐらいしか……」

「ある女の子？てか、キスって……同意の上で？」

「いや、無理やりだが……」

そう言った瞬間、言音は思いっきりため息を付いた。何だそんなにキスが駄目だったのか？

「あんた、今女子高で護衛してるのよね」

「あぁ、そうだが、」

「いい、そういう年頃の女の子は、見知らぬ男に無理やりキスされたら泣くわ、怒るわ。まさか、無理やりキスしたことを悩んでるとか……」

「……そうだな」

「はぁ、いいわ。行きましょう。その娘のところに」

「えっ、」

こうして、何故か言音と一緒にあの少女の家に行くことに……

第6話　変わりゆく自分（後書き）

六甲水「新キャラ、言音さん登場」

言音「こんにちわ。六華が迷惑かけていてごめんなさいね」

六甲水「いえいえ、」

いちご「作者さんは、この人と私が、六華さんを取り合うとか……」

六甲水「考えてないよ」

言音「えぇ、そんなつまらないことはしないわ。」

いちご「そうですか」

六甲水「とりあえず、次回は言音さんが六華さんに謝らせに行かせるから、ちなみに言音さんのキャラ紹介も追加しときます」

第7話　謝罪（前書き）

六甲水「久々の更新です」

六華「かなり久しぶりだな。」

六甲水「色々と書きたいものが増えてね。それに今回はちょっとね……」

六華「何だ？」

六甲水「鮮血先生のあのキャラをちょっと勝手に……」

六華「ちゃんと許可を取れよ。」

六甲水「すみません。」

第7話　謝罪

「さぁ、早く行くわよ」

夜、六華は無理やりキスをしてしまったことについて謝りに行こうと言音に引っ張られていた。だが……

「待て、もう夜の１２時だ。こんな時間に訪ねては迷惑だろ。」

「……それはそうね。なら明日あんたを連れて行くわ」

結局向かうのか。そんな時に六華と言音の携帯に連絡が来た。

「どうやら、仕事みたいね。結局謝りに行くのは無理みたいね」

「そうだな。向かうぞ」

六華と言音はある屋上であるホテルにいるターゲットを双眼鏡で見張っていた。ターゲットの周りには何人かのＳＰが確認できた。

「今回は優秀なＳＰがいるみたいね。特にまだ幼さが残っている子がいるじゃない」

言音はターゲットの近くにいるＳＰの一人に注目していた。六華も双眼鏡で言音が行った男を見た。

「ふふ、まだ幼い感じがするけど、ちょっとしたオーラを感じるわ。只者じゃないわよ」

「確かにな。だが、俺達には関係はないな。言音、頼む」

「はいはい、あなたは追っ手の妨害をよろしくね」

そう言って、言音はトカレフを出した。

「いつも思うが、ライフル使わなくっていいのか？」

「甘いわね。射撃の天才である私に距離なんか関係ないわ。」

バァンと乾いた音が屋上に響いた。そして少し遅れてガラスが割れる音がした。この時は完全にターゲットを殺したと思っていた。だが……

「あら、」

「……」

言音が撃った弾丸はターゲットに命中せず、近くの机に当たっていた。何故なら近くにいたＳＰがターゲットを突き飛ばしていたのだ。

「やばいわね。あそこまでやるなんて……」

「言音、お前は逃げろ。追っ手は俺にまかせろ」

「ターゲットは？」

「フェーズ２『銃がダメなら毒』だ。奴に任せよう」

「分かったわ。時間稼ぎよろしく」

言音は屋上を出て行った。多分に既にこのビルの従業員になりすましているだろう。六華は顔を見られないようにフードを被った。

そして、しばらくしてターゲットの護衛をしていたＳＰが一人やってきた。言音と一緒に見た優秀そうなｓｐだ。

「見つけたぞ」

「……」

俺は刀を抜き男に接近した。男は銃を何発か撃った。六華はそれ全部を刀で弾き、刀の峰で男が持っている銃を弾いた。

「これで……」

追撃に峰で男の脇腹に当てようとした瞬間、刀が掴まれた。そして男は刀をへし折った。

「ここまでだ。大人しく投降しろ。」

男は銃をもう一丁抜き、六華に狙いを定めた。普通なら仕込み刀でさらに攻撃を続けるが……この男相手ではかなりキツイ。

「貴様、名前は……」

「いきなり何を……」

「お前のその身体能力。そして俺の刀を折った。これから何度かぶつかり合うかもしれないからな。名前だけでも聞いておく」

「……久遠龍夜」

「龍夜か。俺はコードネーム『黒き影』。職業柄、真名を教えるわけにはいかない。」

「……『黒き影』。だが、逃げ場がないぞ」

「フェーズ3『鉄の蛇』また会おう」

そう言い残して六華はそのまま飛び降りた。

言音は屋上から飛び降りた六華を回収に来た。六華は公園のベンチに座っていた。

「ずいぶんと重症ね。かなり手ごわかった？」

「まぁな。フェーズ３『鉄の蛇』で逃げてきたが……右腕の義手がボロボロだ。」

「『鉄の蛇』。あれって、普通ならスタングレネードを使って逃げるんじゃなかったの？」

「屋上から飛び降りてビルの壁を削りながら降りてきた。」

「アホね。まぁいいわ。今から彼女のところに行くわよ」

「この腕でか？」

「当たり前よ」

六華はため息をついて、言音と一緒に彼女のもとに行くことになった。そういえば、ターゲットは……

「言音、ターゲットは？」

「大丈夫。『毒蛇』にやらせたわ。今頃苦しみもなくあの世に行ったわ」

「そうか……」

六華と言音は少女の家の前にいた。既に夜が明け時間は7時３０分だった。

「やはりこんな朝早くからはまずいだろ」

「いいえ、コレぐらいの誠意は見せなきゃ」

「そういうものなのか？」

「えぇ、そうよ。」

すると玄関の扉が開き、そこには少女がいた。少女は六華の姿をみるやいなや顔を真赤にしていた。

「あの、何か御用ですか？」

「この間のことを謝りに来た。済まなかった。」

六華は謝罪をして一礼をした。少女はため息を付き、こう言った。

「顔を上げてください。あの時はただびっくりしてつい叩いて……私、若王子いちごって言います。あなたは？」

「無朱締六華。六華でいい。」

「六華さんですか。では私の事もいちごで」

「よろしく、いちご。」

こうして、何とか謝ることが出来た六華だったが、言音は二人の様子を電柱の後ろで見ていた。

「うーん、あの二人、どうにかくっつかないかな？そうだ、組織で話しあおう」

第7話　謝罪（後書き）

六甲水「言音さん、何をするつもりですか？」

言音「あら、組織で話し合うだけです。」

六華「結構組織のメンバーの名前が出てきたな。」

言音「とはいっても、『毒蛇』だけね。あと何人か出すのよね」

六甲水「うん、そうだよ。次回はほのぼのした組織メンバーの話し合いをやるから」

小雪「とりあえず、謝ったほうがいいよね」

流歌「当たり前です」

白雪「……うん。勝手にだしちゃったし……」

流歌「それ以前に龍夜さんって刀折れるのかな？」

小雪「さぁ？とりあえず勝手に出してごめんなさい」

第8話　組織会議（前書き）

六甲水「今回は言音さんがある会議を開きます。」

六華「一体、何の会議だ？」

言音「それは秘密よね。」

第8話　組織会議

言音は組織がの本拠地の会議室にいた。会議室には円状の机と言音の他には六人の姿が見える。

「今回集まってもらったのは他でもないわ」

言音がそう言うと、言音の向かいの席に座る金髪の少年が質問してきた。

「ねぇ、言音。この間の仕事についてなら、僕が毒仕込んで終わらしたけど、それについてなの？」

するとと言音の隣りに座る女性も聞いてきた。

「そうね、ボスまでもこの場に着ている事自体かなり珍しいことだけど、何かあるの？もしかして六華の処分？」

「違うわ。『毒蛇』『針鼠』今回の事態はボスの耳にも入れてほしいのよ」

言音は白い着物を見に纏った女性を見る。この組織の中のトップであるボスだ。

「何かしら？少し面白そうな臭いがするけど、」

「えぇ、今日の議題は…………六華にゾッコンな女の子がいるのよ」

「「「「なにぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ

いいい」」」」」

それを聞いた瞬間、ボス以外全員が驚きを隠せなかった。

「あの、六華にゾッコンだって」

「あの任務のためなら何だってやるって言うあの六華に」

と言う『毒蛇』と『針鼠』。すると、黒い髪の少年が挙手した。

「それって、六華と一緒にいる白雪ってヤツのことじゃないだろうな？だったら、驚いて損だが、」

「違うわ。『終焉』。あの娘は六華の事を兄として慕ってるから、相手はこの娘よ。」

言音は全員に写真を渡すと……

「おっ、意外とかわいいじゃん」

と言ったのは赤い髪にショートヘアーの少女だった。コードネームは『赤火』

「名前は若王子いちご。」

「どこまで進んでるんだ？」

聞いてきたのは銀髪の男だった。コードネームは『水銀』

「まぁ、六華のその娘の口を塞ごうとしただけなんだけど、キスは

してるわ。」

「「「「なにぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ」」」」」

言音の発言を聞いてまた驚く五人。するとボスが立ち上がりこう言った。

「まぁ、別に『組織』では恋愛禁止っていうわけじゃないし、表との関わりを持っちゃいけないなんて決めてないしね。『血染めの花嫁』。あなたの目的は六華とその娘とくっつけようって話ね。私はいいわよ。」

「ありがとうございます。『雪の女王』」

「私も乗った。表とあまり関わらない六華を変えてみたい。」

「僕も乗ったよ。惚れ薬とか何でも作ってあげるよ」

「俺も乗ったな。何か面白そうだからな」

「あたしも乗ったよ。まぁ、色恋沙汰はあんまり分からないけど、」

「俺も乗った。あの六華が女の子とラヴラヴな所を見てみたい」

『針鼠』『毒蛇』『終焉』『赤火』『水銀』の順で答えを言った。

言音は次の議題に移る

「次の議題は、どう進展させるかね。またキスでもさせる？」

「だったら、こう言うのはどうかな？」

と『毒蛇』が挙手をして、言った。

「何か作戦でも？」

「お詫びを兼ねてデートに誘うとか」

「「「「「「それいい案だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」」」」」」

『毒蛇』以外の全員がハモリながら言った。言音はホワイトボードに作戦名を書いた。

「それじゃあ、作戦名は『デート大作戦』で決定。」

「今、六華はどこにいるの？」

『針鼠』が質問すると、言音はため息をついて言った。

「この間の任務で刀折れたから、白雪と護衛対象と一緒に刀を買いに行ってるわ」

「あいつ、全くだめだな。それじゃあ、これ、作戦の要となる映画のチケット」

『毒蛇』が渡したのは恋愛映画のチケットだった。言音はそれを受け取り、全員にこう言う。

「決行は次の日曜日よ。全員心して掛かるように」

「「「「「了解」」」」」

その頃六華は……

「何だこの寒気は？」

「どうしたのお兄ちゃん？」

「どうかされたんですか？六華さん」

「いや、何でもない。」

寒気を感じていたのだった。

第8話　組織会議（後書き）

六甲水「君らの組織面白いね」

言音「みんな、六華がすきだからね」

六甲水「とりあえず、次回はデートかな。『毒蛇』の名前もでる予定だから」

第9話　Ｆａｓｔ　Ｄａｔｅ（前書き）

六甲水「久々の更新です。」

雪那「本当に久しぶりだな。」

六甲水「更新止まってるの多すぎて、休みの時に一気にあげていきたいと思います。今回の話はデートですよ」

雪那「とはいえ、組織絡みだろ。」

六甲水「まぁね。組織がどんな風に関わるかお楽しみに」

第9話　Ｆａｓｔ　Ｄａｔｅ

ある日の放課後、いちごが一人歩いていると、一人の女性が自分の家の前で待っていた。

「あなたは……」

「こんばんわ。私とははじめましてだよね。」

待っていたのは言音だった。いちごは少し警戒していたが、言音は笑顔で話しかけてきた。

「大丈夫よ。私はただあなたに渡したいものがあるの」

「渡したいものですか？あと、私とあなたは初めましてではないです。この間六華さんと一緒にいた人ですよね。」

「えぇ、そうよ。それで六華の奴はこの間のこと謝ったじゃない。」

「はい、」

「私的には、あれで許しちゃ駄目だと思うから……はい、コレ」

言音はいちごに一枚のチケットを渡した。チケットは映画のチケットだった。

「あの、これ？」

「ほんのお詫びよ。あと頼みたいことがあるの」

「頼みたいこと？」

「実は……」

言音はいちごと別れると直ぐに組織に電話をした。

「もしもし、こちら、言音です。」

『あら、どうだったの？』

「はい、『雪の女王』。毒蛇が用意した映画のチケットを上手く渡せました。もう一枚の方も六華に渡しました。」

『ふふ、彼女には何て言って渡したの？』

「『六華が人付き合いとか苦手だから、あなたに少し協力して欲しい』って言ったら一発で了承してくれました。」

『そう、決行は次の土曜日ね』

「はい」

二人は……というより、組織の幹部メンバーは次の土曜日に集まるように招集をかけるのだった。

そして、次の土曜日、駅前で六華は待ち合わせをしていた。

「言音の奴。無駄な気を回しやがって、」

六華は言音から、いちごのお詫びがあの程度じゃ悪いから、今度映画でも付き合ってやれと言われ、ここにいた。すると、私服姿のいちごがやってきた。

「こんにちわ。六華さん。」

「来たか。悪いな。こんな事に巻き込んで」

「いえ、私は大丈夫です。六華さんもお仕事の方はいいんですか？」

「あぁ、同僚に任せた。」

流歌の警護の仕事は六華の代わりに、今は白雪と言音が引き受けている。六華といちごの二人はまだ上映時間まで時間があるので、近くのファミレスに寄って行くことにした。そんな二人を見守る人物がいた。それは……

「こちら、『毒蛇』ターゲットが動き出しました。」

『こちら言音。今回の任務はコードネームは必要ないわ。本名を言いなさい。』

「分かったよ。こちら、琉宮暁人。二人は近くのファミレスに入りました。」

『了解よ。私の方も六華の仕事を行っているわ。』

「そういえば、六華の警護相手って一体何者なの？」

『さぁ、ボスが云うには大切な人物らしいわ。』

「そうなんだ。こちらは引き続き、後をつけます」

『了解、任せたわよ。』

こうして、暁人が見張る中、二人のデートが始まるのだったが、まさかあんな事になるとは思ってもいなかった。

第9話　Ｆａｓｔ　Ｄａｔｅ（後書き）

六甲水「次回、事件が起こります」

暁人「というか、コレ、終わりがあるの？」

六甲水「まぁね。少しずつだけど流歌の正体が明かされるから」

暁人「物語に重要なの？」

六甲水「まぁ、一応ね。」

第１０話　変わる心と赤い傘（前書き）

六甲水「今回はデートですが、」

言音「何かあるの？」

六甲水「ラストあたりシリアス展開かな」

第１０話　変わる心と赤い傘

今日、この日六華といちごは言音というより、組織の策略でデートをすることとなった。そして、その後を付ける『毒蛇』暁人だったのだが……

「こちら、暁人。言音。聞こえるか？」

『何かしら？何か進展でもあったのかしら？』

暁人は携帯で言音に連絡をとっていた。言音は何かしらの進展があったと思っていたのだが……

「喫茶店にいるんだけど、二人普通にお茶飲んでるだけどよ。」

六華といちごは二人して、ただお茶を飲んでいるだけだった。組織のメンバーはきっと喫茶店でいちゃいちゃトークを繰り広げると思っていたのだが……全然違っていた。

『さすがは、六華ね。喫茶店をただ水分を補給するとこしか考えてないわね。』

言音はそう言って、溜息をつくのだった。

だが、言音たちの予想はあっさり裏切っていた。

「ここの紅茶おいしいですね」

いちごは美味しそうに紅茶を飲んでいた。六華はコーヒーを飲みながら答えた。

「仕事に疲れたときに、いつもここに立ち寄るんだ。お前にもかなりオススメできる」

「そうですか。では、部活の帰りに寄ってみたいです」

「部活？何をやっているんだ？」

「チアです。かなり大変ですが、楽しいです。」

「そうか。」

などの会話を楽しんでいた。六華といちごはただの世間話だと思っていたが……周りにいた他の客は……

（（（（（（いちゃいちゃしやがって））））））

と心の中で突っ込んでいた。

その頃、組織では……現在ボスの代役をしている『雪の女王』が頭を悩ませていた。

「さて、どうしたものか」

「どうしたんです？ボス」

と黒髪の少年、『終焉』が聞いてきた。ボスは『終焉』に一枚の写真を見せた。

「同盟組織と警察から回ってきた写真と詳細よ。あなたも聞いたことあるでしょ」

「こいつは……表と裏でも嫌われている奴じゃないですか？こい

つがどうしたんですか？」

「最近、殺し屋が何人かこいつにやられてるわ。それに、女子高生くらいの子も殺されてる。」

「何で、こいつがそんな事に動いてるんですか？」

「簡単よ。目的も分かってるわ。狙いは私たちの組織、標的は六華と六華の護衛対象ね」

「護衛対象……ボス、六華の護衛対象って……」

「えぇ、この事は私とあなたしか知らないわ。天原流歌。彼女は……」

そして、『終焉』が持っている写真に写っていたのは、黄色い着物に赤い傘を持った男だった。

暁人はしばらく尾行をしていた。六華といちごはもらったチケットで映画を見ていた。

「言音、マジで普通に映画を見てるよ」

『くっ、何かしらのハプニングを期待してるのに』

と二人は話していたのだが……六華達はというと恋愛映画で盛り上がるキスシーンが流れていた。

（そういえば、事故とはいえ、いちごとキスをしたんだっけな。とっさのことであんな事をしてしまったが、今になって恥ずかしい。ん？待て、何で恥ずかしいという気持ちが出てきたのだ？そんなモノとうに捨てたと思っていたが、ふふっ、こいつと関わって変わったんだな。俺は……）

と六華は思う中、いちごは顔を真赤にしていた。

（そういえば、私も六華さんに無理やりキスされたんだっけ。あの時はびっくりしちゃったけど、今思うとそれがきっかけなんだよね。）

と二人の心のなかは、こんな感じであったのだった。

暁人はもうこれ以上、進展がないと思い帰ろうとしていた。

「これはまた組織会議で話し合うくらいしないと……」

と呟いていると、誰かの視線を感じた。暁人は辺りを見渡すが怪しい人はいなかった。

「気のせいかな？」

六華といちごは映画を見終わり、外に出ていた。外はさっきまで晴れていたのだが、今は黒い雲が空をつつみ、今にも雨が振りそうだった。

「雨が降るな。今日はこれで解散するか」

「そうですね。あの、また機会があったら……その、」

「また一緒に出かけるか。まだお前に紹介したい場所があるから」

「はい」

二人はこうして、別れ。六華は流歌の家に向かうのだった。

歩いている途中、激しい雨が降ってきた。六華はあまり濡れるのは嫌いでもなかったから、のんびり歩いていた。ふっと、昔のことを思い出した。

「そういえば、あの日も……」

『あの日も、こんな雨だったね』

突然、誰かの声が聞こえ、六華は警戒すると、六華の前に黄色い着物に、昔使われていた傘を刺した男が立っていた。

「お前は……」

『こんばんわ。いや、今はこんにちわだね。腑抜けた六華くん』

「何で、俺の名前を……」

『いやいや、まさかあの『黒い影』が女の子とデートとは、本当に腑抜けだね。昔は立派な刃を持っていたのに、ねぇ、六華くん』

「黙れ！！何者だ。」

『そうだね、自己紹介がまだだったね。私は華雄。もちろん本名じゃないさ。ちなみに目的は君と君の護る天原流歌の殺害だよ。まぁ、手違いで何人か死んじゃったけどね。』

「なるほど、殺し屋か。なら、お前をここで消す」

六華は義手に仕込んだ仕込み刀を出し、華雄に向かっていった。だが、華雄は……歪んだ笑顔だった。そして……

『じゃあ、私は君を……殺すね』

その瞬間、雨と一緒に血が降った。

第１０話　変わる心と赤い傘（後書き）

六甲水「やっとシリアスだ」

言音「というか、本当にけいおんらしさが無いわね」

六甲水「まぁ、それは気にしない。結構今回の新キャラは考えるの大変だったよ。とくに名前が。全然思いつかなかった」

言音「そう、で、次回は？」

六甲水「戦いの続きかな。いちごとの仲も進展したいし」

第１１話　華はいつ咲く（前書き）

六甲水「今回からは最終章です。」

六華「ということは、終わりが近付いているということだな。」

白雪「全く出番なかった。」

六甲水「まぁまぁ、とりあえずはじまります。」

第１１話　華はいつ咲く

雨と共に真っ赤な血が一緒に降り注いでいた。六華は自分の左肩を見ると、左肩は切られていた。

「つぅ、」

『あれ？本当は首を斬るはずだったんだけど、外しちゃった。ごめんね、楽空に殺そうと思ったんだけど、苦しみながら死ぬことになるね。』

華雄は歪んだ笑顔で六華を見つめていた。六華は再び華雄に向かっていくのだが……

『予告。次は右脇腹。』

華雄のその言葉を聞いた瞬間、六華の右脇腹に激痛が走った。六華はあまりの痛みに地面に膝をついてしまった。

（おれは……何に斬られてる？奴は何か隠してるのか？だけどそんな動作は無かった。）

『ねぇ、君は何で殺しなんてやってるの？』

華雄がつまんなそうに聞いてきた。六華は脇腹を抑えながら立ち上がり、華雄を睨みながら答えた。

「貴様に関係ない。俺は俺のために戦っ……」

『嘘だね。』

華雄は冷たい目で六華を見つめながら一歩ずつ近寄る。

『自分の為に戦ってる？違うね。なら、家族を失った時に組織が拾ってくれた。だから組織に恩を返すために戦ってる？違うね。依頼人のため？それも違う。白雪を護るために戦う？それも違う。君は自分が犯した罪を忘れるために人を殺している。そうだよね。』

「な、何を……言っている。」

『組織に拾われて、殺しの訓練をしてきて、初めての仕事はどうだった？簡単だったでしょ。何の罪悪感もなかったよね。そうだよね、人を殺すのもあれで四人目だったんだから……ねぇ、六華』

華雄は傘から仕込み刀を取り出し、六華の義手を切り落とした。六華はそのまま地面に倒れ込んだ。

『あなたはずっとそうやって自分の罪に怯えながら、あの娘と付き合うのかな？ねぇ、六華』

華雄は六華の首筋に刃を当てた。

『それじゃあね。六華』

華雄は刀を振りかざした。六華は気力を失い動くことすら出来ない。だが、華雄の刃は六華には届かなかった。それは一発の銃弾によって止められたからだ。

『あれ？』

「何、私たちの仲間を殺そうとしてるのよ。あんたは……」

撃ったのは白いドレスを着た言音だった。華雄は言音を睨んだ。

『血染めの花嫁さんか。警告のつもりで刀を狙ったんだろうけど、ダメね。狙うならしっかりと頭を狙わないと……』

「あんた、男に見えるけど女でしょ。どんなに偽ったところでバレバレよ」

『あら、さすがはスナイパーね。要らないところまで見抜くなんて……でも、あなたひとりで私を止められるの？』

「そうね、一人ならね。」

言音がそう言った瞬間、赤髪の少女と銀髪の少年が華雄の背中にナイフを当てた。

「コードネーム『赤火』」

「コードネーム『水銀』」

『へぇ、仲間思いなんだ。まぁこのままやったら私の方に分が悪いわね。残念だけど、今回は逃げさせてもらうわ。』

華雄は懐からスタングレネードを取り出して、爆発させ、逃げ出した。

「……ここは」

六華は目覚めるとそこは小さな個室だった。六華はその部屋にあったベッドで寝ていたらしい。

「そうか……俺は負けたのか。」

何があったのか思い出した。あの時、華雄と名乗る人物に体も心も斬られた。六華は義手を見ると壊されたはずが、既に新しいのが右

腕になっていた。

「ようやく、目覚めたか。」

「……久しぶりだな。霧島恭介」

タバコを咥えた白衣の男、霧島は裏の世界でも有名な医者でもあり、六華の子供の頃の事故の傷を直したこともあった。

「ずいぶんとやられたみたいだな。組織を抜けだそうとして、粛清を受けたか。それだとお前のお仲間は助けないか。」

「……俺の罪を知る奴にやられたとでも言っておく」

六華はそう言い残し、部屋から出て行った。霧島はタバコを灰皿に捨てた。

「過去を知るか。面白い出会いでもしたのか。」

霧島は部屋を出ようとすると、二人の姉妹が病室に入ってきた。

「ちょっと、あの人勝手に退院したんだけど、いいの？」

「まだ怪我治ってないよ。」

「吹雪、芙雪か。奴なら大丈夫だろ。怪我の一つや二つで寝ている奴じゃない。ただ……」

「ただ何よ？」

「心の傷は癒えないままだ。」

六華は一人、公園のベンチに座っていた。今のまま組織に戻っても何も出来ない。そして歩いているうちにこの公園に来ていたのだった。

「こんなところで何をやっても……傷は治らないか。」

六華はそう思い、目を閉じた。聞こえてくるのは遊具で遊んでいる

子供の声が遠くから聞こえてくるだけだった。

（このまま光の中で生きるより、何も見えない闇のなかで生きたほうが……）

「あの、風邪引きますよ。」

六華は全てから心を閉ざそうとした瞬間、聞き覚えのある少女の声が聞こえた。六華は目を開けるとそこにいたのはいちごだった。

「ここで寝る趣味でもあるんですか？」

「いや、それはないな。」

「それに傷だらけで、今度は事故にでもあったのですか？」

いちごは心配そうに聞いてきた。六華は一度目を閉じ再び目を開いてこう言った。

「どうしても償えない罪があるとしたら、お前はどう思う？」

「……何かあったんですか？」

いちごは六華の隣に座った。六華はいちごを見つめながら口を開いた。

「忘れたい罪が俺を苦しめる。」

「忘れたい罪？」

「あぁ、俺は……子供の頃、家族を殺してしまった。」

これから始まるのは六華の冷たい過去だった。

第11話　華はいつ咲く（後書き）

六甲水「というわけで、次回過去編。そしてその次で最終回、番外編をやっての終わりです。」

六華「聞いてないが……」

流歌「私も」

六甲水「いい感じに終わりそうな感じかなって、最終回あたりで色々と解決するから、そう、色々とね」

第１２話　海の底に映る月（前書き）

六甲水「今回は六華の過去話です。」

六華「どんな風にやるんだ？」

六甲水「それは、今からやるからね。」

第１２話　海の底に映る月

俺が７才のときに、そうまだ家族が生きていた時のことだった。父親は普通の企業マン、母親は俺や姉を見守る人。姉は何かと俺の面倒を見てくれる人だった。だけど、そんな幸せの生活も父親が犯した罪で壊された。

「すまない、本当に済まない」

「いいのよ。貴方が気にすることじゃないわ。」

「そうだよ。お父さん。お父さんはそうするしか無かったんだから……」

当時、父親が何をしたのか分からなかった。だが、組織に入ってからそれを知った。父親は汚職をしたのだ。父親は何のためにそんなことをしたのかは今になっては分からない。けど重い罪を背負うことになったのは分かった。

『犯罪者』

『金泥棒』

『くたばれ』

事件を聞いた人々は俺たち家族を責めた。その日から父親は家にずっと家にいて、俺たちを周りの人達の非難から守り続けた。母親は家でずっと笑顔で俺たちを守った。姉さんはクラスメイトからいじめを受け続ける中でも、俺を守った。俺はこの時ずっと思っていた。

何でみんな辛い目に合っているのに、俺に笑顔で見守ることが出来るんだ。

そんな雨の降る日、父親の提案で息抜きをしようと一緒に家族で出かけた。でもその時事故は起こった。猫何かが車の前に飛び出し、避けようとした瞬間対向車のトラックとぶつかった。

俺は目覚めるとそこは火の海の中だった。車の下敷きになった母親、トラックのタイヤに押しつぶされた父親、姉さんは見当たらなかったけどきっと死んでる。俺は……無くなってしまった右腕の痛みに耐えながらあたりを見渡す。すると、トラックの運転手が倒れているのを見つけた。

「あ、あ、助けてくれ。」

トラックの運転手は両足を失っており、そこから血が流れていた。俺は冷たい目でそれを見つめた。

「あぁ、そうか。あんたも俺の家族を恨んでいる奴か。」

「ち、ちが、ちがう。」

「……そうやって死んでいてくれ。」

俺は傷口を抑えながら森の中を歩いた。痛みがさっきまで激しかったのが今は何も感じなかった。

「はは、あははは、母さんたちはこれで救われた。あんな辛い目から救われたんだ。あはは、あはは、」

俺はそのまま地面に倒れ気を失った。

いちごは俺の過去を黙って聞いていた。

「そのあと、俺はボ……いや、恩人と言うべき人に助けられた。今はそこで恩を返すために働いていたんだ。だけどそんなのただの罪を忘れるためだったんだと思う。」

「……」

「これで俺の話は終わりだ。もう会うことはないだろうな。」

俺はベンチから立ち上がり、そのまま公園を出ようとした。だが、後ろから抱きつかれた。

「なんだ。まだなにかあるのか？」

「いえ、出来ればこのまま私の感想を言わせてください」

「……駄目だ。」

「いいえ、聞いてください。」

「……勝手にしろ」

六華は諦めて、いちごの話を聴くことにした。

「確かに、あなたは何の罪もないトラックの運転手を見殺しにして

しまった。多分まだ息があった両親も……でも、そんなことで貴方が悩む必要はないです。」

「……若王子。」

「いつまでも過去に拘る必要は無いと思います。六華さんは罪を忘れずに誰かのために生きて行くことが償いと思います。」

「……そう考えばいいんだな。」

「はい。」

六華はいちごの手を引いて、キスをした。いちごは少し抵抗したが少しずつそれが無くなった。唇を離すと……いちごは恥ずかしそうにしていた。

「……また無理やりキスですね。」

「悪かったな。でも今はこう思える」

「なんですか？」

「お前と一緒にいたい。それだけだ。」

「……あの、もう一回してください。」

俺といちごはもう一度キスを交わすのだった。

数日後、俺は組織の雪の女王の前で土下座をしていた。

「何の催しかしら？」

「俺は今まで自分の罪を忘れるために人を殺してきた。だけど今は違う。俺は俺の命を救ってくれた、俺を好きだと言ってくれた人のためにこれからもここで働いていきたい。」

「……だから、あなたは私に何を言いたいのかしら？」

「……闇のなかで生きる人間が光のなかで生きる人を好きにな

った。それはいけないことか聞きたい。」

「へぇ、彼女出来たんだ。やったじゃん。」

雪の女王は嬉しそうにしていた。六華も何が何だか分からなくなっていた。

「それで、付き合うのは……」

「いいわよ。別にぶっちゃけ私の姉さんも同じような感じよ。」

「は、はぁ」

「それにウチは表向きは清掃会社だから、連れてきても構わないわ。」

「ありがとうございます。」

六華はそのまま帰ろうとすると、雪の女王は呼び止めた。

「あぁ、そうそう。明後日あたり白雪ちゃんをとある場所に連れてきてほしいのよ。」

「……分かった。」

第１２話　海の底に映る月（後書き）

六甲水「次回は最終回です。最終回で天原流歌と白雪の事が解決します。」

最終話　白い雪は家族のもとへ、赤い傘は天の原に（前書き）

六甲水「今回で最終回です。」

六華「意外と短かったな。」

流歌「全く出番なかった。」

白雪「私も……」

六甲水「いや、今回は二人メインだったりするから」

最終話　白い雪は家族のもとへ、赤い傘は天の原に

六華と白雪は雪の女王に言われた公園に来ていた。

「ここに誰か来るの？」

「ん、あぁ、しばらく待っていれば来るらしい。」

白雪と六華が待つこと十分、公園に黒い髪にセミロングの少女が一人やってきた。六華と白雪はその少女を見て驚いた。髪の色や髪型は違えど、顔は白雪そっくりだったからだ。

「あ、あなたは……」

「本当に、本当に白雪なんだね。」

「……悪いけど、君は？」

少女は六華を見つめて微笑んだ。

「私は霧生小雪。白雪の姉です。」

そして、姉である小雪の口から白雪の詳細を聞いた。白雪は昔ある病院で入院をしていた。だが病気で外に出ることが出来ず、ずっと家族に辛い思いをしていたと思い、姿をくらませていたのだ。それから六華が拾ったということだ。

「お、お姉ちゃん。」

「うん、長い隠れんぼだったね。」

小雪は白雪を抱きしめた。白雪はだんだんと泣き出した。六華はそれを見送りながら公園を後にしたのだった。

「……雪は家族の元へか。」

雪の女王は白雪と小雪の二人をビルの屋上から双眼鏡で見ていた。すると雪の女王の後ろにとある二人がいた。

「これで問題は解決したのね。雪華ちゃん。」

「そのセリフは私よ。姉さん。」

「どうやら、全てはあなたの目論見だったんですね。雪の女王。」

「えぇ、そうよ。ボス。いいえ、天原流歌様」

一人は白雪の母親である雪奈と普段見せない顔をした流歌だった。

「全く、あなたのせいで、一人スナイパーが失ったじゃない。」

「それは悪かったが……その代わりに六華が過去を振り切るために協力したじゃないか。」

「えぇ、そうね。それにしても面白い名前ね。華雄なんて」

「ふふ、六華と白雪は楔をなくしてあげないと行けないからね。雪奈さん。白雪のことは生まれたときに病院でずっと長期入院していたということにしておくわ。」

「あら、嬉しい。」

三人は一人歩く六華を見つめた。すると、雪華はニヤニヤしながら流歌を見た。

「それにしても、表と裏の嫌われ者の衣服を使うなんて大胆ね。」

「あら、アレは私のことを殺そうとしていたのよ。貴方だって気づいていたじゃない。でも、まさか直ぐに殺して、その衣服を使うなんて面白いアイディアね」

「そうかしら？それで六華はこれから一人で仕事をするのかしら？」

「上司である貴方はそんなことに気がつかないなんて……まったくもってダメね。給料減らそうかしら？」

「ひどいわね。」

「ふふ、だって、あの人は可愛い彼女がいるからね。」

最終話　白い雪は家族のもとへ、赤い傘は天の原に（後書き）

六甲水「というわけで、最終回でした。」

六華「今回は全部流歌と雪の女王の目論見だったとはな」

流歌「あなたがいつまでも過去に縛られてるからね。」

六甲水「まぁ、最後はグダグダだったけど、あとは番外編をやるから」

六華「何の話をやるんだ？」

六甲水「六華といちごのデートを組織の幹部全員で追跡かな。」

番外編　デート＋追跡（前書き）

六甲水「今回でこのシリーズも終わりです」

六華「最後はデートか」

番外編　デート＋追跡

『組織』のとある会議室に雪華と流歌の二人が深刻な顔をしていた。

「じゃあ、幹部全員配置についたのね。」

と流歌がいうと雪華が微笑みながら答える。

「えぇ、みんな準備万端よ。終焉の方は乗り気じゃなかったけどね、」

「まぁ、普通ならやらせないけど……今回は違うわ。今回は組織総員してやらないといけないから……」

「えぇ、なんてたって……」

「「六華がデートという面白そうなイベントを追跡しないわけには行かない」」

駅前で六華といちごが二人で歩いている姿を何人かのメンバーが見ていた。

「こちら、言音。たった今六華といちごちゃんが楽しそうに歩いているわ。」

「こちら毒蛇。こちらからも確認完了。というか何でボスはいちいち追跡なんてするのかな？」

「さぁね、とりあえず分かるのはあの六華に恋人というものが出来た時点面白そうな予感がしていたのよ。というか、あの二人のキスの話聞いた。情熱的なキスだったらしいよ」

「あーそー、とりあえず二人は喫茶店に入ったみたいだから、あっちは赤火と針鼠任せようよ」

六華といちごの二人は喫茶店で珈琲を頼んで談笑をしていた。

「はぁ、外国ですか。」

「あぁ、仕事で夏の間そっちの方に行かなければいかなくなった。

だから夏には会えないな。」

「……でも六華さんが行くまでは一緒にいられますね」

「ふっ、そうだな。」

と言った具合の会話を六華たちの席の近くの席でむずがゆそうにしている人がいた。

「うぅ、何だこの甘ったる空気は」

「相変わらず赤火はこういう空気に慣れてないね。普通見たら仲睦まじい恋人同士の会話だけどね。」

「針鼠は慣れてるみたいだけど……」

「まぁ、こういうのは慣れてるし……てか六華の楽しそうな表情見のって初めてかな。」

赤火は六華やいちごたちの方を見ると確かに六華の楽しそうな顔を伺えた。

「表と関わるとあんな風になるんだな。」

「そうだね。」

六華といちごは図書館で本を読んでいる中、水銀と終焉の二人は見張りをしながら読書をしていた。

「たくっ、ボスも物好きなことをするよな。」

と終焉は退屈そうに言うと水銀も退屈そうにしていた。

「確かに、ほっておけばいいものを……てか一回やったからいいものを……」

「このまま読書にふけこもうぜ」

二人がそんなことを言っている中、六華といちごはというと……

「六華さん、一ついいですか？」

「なんだ？」

「いえ、さっき外国の方に行くと言ってましたけど……英語が不得意というのはどうかと思いますよ」

いちごがそう言うと六華は少し黙ったまま答えた。

「そう言ったことは教わらなかったからな。」

「いえ、普通教わるべきかと……折角ですから今度教えましょうか？」

「済まない。助かる。」

「御礼にまたデートに誘ってください。」

こうして二人は夕方まで図書館にいたのだった。二人は図書館を後にし近くの公園にいたのだ。

「今日はありがとうございます」

「いや、お礼を言われるほどではない。まぁ今度お礼を言うのは俺の方かもな。」

「勉強ですね。私も出来る限り教えます。あと秋にある学園祭の方にも来て下さい」

「あぁ、分かった。」

二人は他愛のない話をして別れたのだった。

次の日、六華は言音にある事を聞き出した。

「言音。」

「あら？何六華？」

「他の幹部にも言っておけ。追跡するなら気配ぐらい消せと」

「……バレてたとは」

番外編　デート＋追跡（後書き）

六甲水「まぁ、最後までグダグダだったな。」

六華「そうだな。」

六甲水「まぁ、学園祭での話とかは描くかもしれないし書かなかったりします。」

六華「次回作とか決まってるのか？」

六甲水「次回作はなのは系かな」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8848o/

けいおん　DARKHERO＆STRAWBERRY

2011年6月3日04時57分発行